

故大上宇一氏追憶記集

故大上宇一翁の遺品調査中判明したことであるが、翁は動植物の専門学者や地方の研究家に多くの交渉をもつていた。既に故人になられた方が多いが、現存の数氏に追憶をお願いしたところ幸に翁を訪問されたことのある三木茂博士、井口宗平氏並に吉野善介氏が玉稿をお送り下さつた。三木博士は植物化石、水生植物の大家であることは学界周知のことであり、井口宗平氏は現在研究生活から遠ざかつていられるが、且ては松村松年専士に昆虫を送られ、新属、新種を多数発見されたことは、本会編集「郷土の生物」第一集で御承知のことと思ふ。又吉野善介氏は備中植物の研究を以て令名あり、ヨシヤナギ、ヨシアザミ、ナツアサドリの学名等にその名を留めていられ、老齡尙壯健で備中高梁町に在つて高著「備中植物誌」の改訂をされつゝ「備中植物研究」を発行されている。一言玉稿に蛇足を添えて故翁と共に三先生に深甚の謝意を表してやまない。

(Sept. 20. 1949 建部惠潤記)

故大上宇一氏訪問の目的と當時の思い出

中國の山地を形成せる岩石は古い花崗岩が骨子となり、其の間に三紀中新世の地層が廣く露し、更により若い地層も一部分露達して居る等多様な環境があり、従つて大陸と共通するものも生き残り、南方の要素と北方の要素が生育する等先輩により多くの興味ある研究調査が発表されて居る。

日本の植物の構成に就き私は盛岡高農林学科在学中より興味を持ち、引続き京都大學に大正12年入学の後もよく採集旅行をした。其の年の夏休みの終りに郷里香川縣より帰校の途を津山、勝山、大山を経て採集し西の方を幾分學することを得たので更に其の中間地帯を見たいと思ひ、此の由を小泉先生にお話し申した所、幸いコヤスノキが播磨にあるから序に苗を持つて帰つて呉れないか自分は大上氏に手紙を書くからとのこと、當時生は日本樹木誌御完成の意図のもとに御努力中なりしを以て、私は紹介状を持つて勇んで大上氏宅を訪問する様な次第となつた。此の時は大正12年10月30日で秋晴の続いた年であつたことを記憶して居る。

來意を告げるや御子息様と前の小高き山地より自然生のものゝ内より手頃の一株を掘りとられ、之を持ち帰京大植物園の西南隅の道路脇に植え園を飾る珍樹の一つとなつた。而し其の發育は株が古い爲か思わしからざりしも1m余高となり常に開花結実せり。現在は農学部事務室建設の爲移植原位置より移動せるも大上翁の御好意を物語る。

尙御宅には附近の山地より採集せられ鉢植となして居られたものにはタキミシ、ホライカヅ等あり、私には凡て実物としては初めて見せられたものであるから非常に興味深く、今も記憶に残つて居る次第です。而し急いだ爲か其の他自然に関する深い御造詣をうかがうことをなまなかつたことは浅学なる自分の不明にして且つ残念に存じて居る次第であります。

(Mar. 18. 1949 理学博士 三木茂)

大上さんの思い出

大上さんは慶應元年生れたつたから健在ならば今年八十五才になれる筈です。ヒヨロヒヨロとした細高い身体で力仕事にはが手だつたらしい。話をする時には目尻にしわをよせてニコニコとし

て高い調子の声できわめて物やわからかに話をしてエヘ……とよく笑つて居られた。

私が大上さんを知つたのは、たしか明治40年の頃でした。当時岐阜市の名和昆虫研究所から刊行された月刊雑誌昆虫世界に「播磨産甲虫類」と題する目録を毎月引つゞき書かれるので、はじめて隣郡の揖保郡に同好者のあることを知つて端書を一枚出したのです。其の返事の中に「虻蜂とらすの小生神経衰弱にて思う様に研究も出来ず云云」とあつたのを記憶して居る。

明治41年9月上旬頃、私は大上さんの宅をはじめて訪問しました。自轉車も汽車もなかつたから脚絆がけわらじばきで約六里半の道を徒歩で行つたのです。初めての大上さんの印象は物やさしいお医者さんみたようでした。六疊一間の内には本棚にギツシリつまつた本やら雑誌やら、いろいろの箱やら標本がそのまゝおいてあるやらで、話のうちに次々と植物のおしばやら、貝類の標本やら動物の齒やら、古い石器のやうな物やら、たとえばコウモリの乾製標本のやうなものまで、座敷一ぱいに取りひろげられて諄々と説明されるので、私如き昆虫一本槍の間口の小さい人間は戸迷ひしてポーズとなるようであつた。爾來四十年を経過したが今でもよく記憶に残つて居るのは、理学博士白井光太郎氏が自著「日本産菌類目録」の扉に

香島村高きかをりぞ忍ばるゝ

きのこの絵巻見るにつけても

と自署して贈つて來てあつたことです。その大上さんのきのこの絵巻も見せてもらつた。何でも10数年前豪雨のあつた時家のかみの溜池の高い堤が決潰して他家も天井にとゞく程浸水して辛くも倒壊を免れたとの事でまだ泥のついたまゝの植物の標本を、これは伊豫の石鎚山からこれは但馬の氷の山からと古新聞にはさんで縄でからげたまゝのものを際限なく引つぱり出して見せてくれた。

一泊させてもらつて夜床の中で大上さんの述懐に曰く、

「井口さん、僕等のやうな貧乏な者が、いろんな物さきな眞似をして世間からは笑われ、自分ではおいしい物もようたべず、新しい着物もよう作らず、人並みに物見にもよう行かず、すべてのものを挙げて此研究に打込んで此年月をすごして來ましたが、これも一種の病ちゆうものかな。それでも、こんな不備な貧弱な研究でも、或いは大学や研究所あたりの調査の到らぬところを補う何かのタシにならんとも限らんとするがナア」

と。私はそれを聞いて何とも云えぬ嚴肅崇高な精神にうたれて襟を正さずに居られなかつた。私は大上さんに「これ程研究が出来て居るのなら何処か中学校へでも奉職されたら」といつて見たが答はたゞエヘ……と笑殺されたまゝだつた。恐らく大上さんは何物にも拘束されずに純眞に研究をたのしむのを生命として居られたのでしよう。それでもこんな事をいはれた。

「僕がもう少し勉強して藪医者免状でもとつて居たらなア、医者もあまりはやるとかなわんが研究の暇にポツリポツリと病人を診る位なら丁度よいと思うけれどナア」

一泊の翌日伴うて私の宅へ歸つたが、道々私は路邊の草を一々名をおそわつた。其の翌日は櫛田の瀧へ採集に行つた。亡弟が姫路師範の一年生で夏休の宿題に植物の標本を採集して居たので亡弟も大変命名に便宜を得た訳である。

其後も四、五回お互に行つたり來たりしましたが、そのうち私が昆虫の研究をやめたので自然疎遠になつた。昭和5年頃であつたか、久しぶりで大上さんを訪れたが、その時藓苔類の解説書上下二巻を示された。それは半紙二つ折にしてとじたもので一頁に一種づゝ実物を貼りつけ、学名和名

産地等一々精細に記入してあつた。大上さん曰く

「僕もだんだん年はよるし、生い先も短くなつたが、何か一つまとまつたものを死後に遺しておきたいと思つてこの解説を一生懸命に集成して居たが先頃やつと完成しました。チト無理をしたので持病の神経衰弱がおこつて困つて居る」

とのことで、私との座談にもたえぬ風で折々中座して別室へ休みに行つて居られる様子でした。

其時は日帰りにして別れましたが、其後どちらからも音沙汰なしで逝去の報もほのかに承つたまになつて居ります。大上さんにはまだこの外にいうにいわれぬ深厚な理解と御同情を得ている私の一大事もあるのですが、とにかく私は此人の如く名利に淡く、清純無垢、仙骨稜々たる人物にはかつて逢つた事はない。最後におたすねした時にも私は

「これ程迄に多年研究集蔵されたる文献や標本もあなたの亡き後で散佚させてしまつては学界のためにも残念な事であり、誰か篤志の後継者を得て、それぞれの部門にわかれてもよいから、此の努力を基礎にして進んで貰う様にしたらなら、あなたも死して瞑すべきではないか」

と話した事でした。眞実の種子は何時かは芽をふかすには居ない筈ですが、幸いにも兵庫縣下にも若い篤志の方々が輩出せられて、自然大上さんが多年の蔭の努力も次第にあかろみに出るようになって來た事は生前辱知の私の大きな喜びであり、大上さんも地下で定めしニツコリと会心の笑みをたゝえて居られる事と思います。 - (Aug. 30. 1949 佐用郡久崎町 井口宗平)

大上宇一氏の思い出

私が大上宇一氏の名を初めて知つたのは、植物学雑誌の雜錄欄に矢部吉禎氏が、大上氏の採集中の珍しいものを紹介してあつた時からで、クロタキカヅラ、タキミシダ、リュウキユウゴザクラ等であつたと記憶している。その後明治36年頃から文通したが、その手紙類は他のものも含め43年正月家宅類焼の際烏有に歸した。後播磨産稀産植物標本の送付を依頼し、植物学雑誌の抄録送付を乞うたこともあつた。その後大上氏より受けたのは年賀状ぐらいのものであつた。又大正14年春京大の田代善太郎氏が初めて來訪され、希望によつて紹介状を書き送つたこともあつた。

標本は余り多く交換しなかつたが、私の送つたチュウゴクガマヅミその他の備中稀産植物の標本が同氏の著「中國植物図説」の資料となり、今日尙その標本が残つている由建部惠潤氏から報知を得た。同氏の送られた標本は卒直に申して不完全なものであつた。而し今尙記憶していることは私がナツアサドリを発見した当時、ナツグミを知らず同氏へ標本を求めたところ、ナツグミの名でナツアサドリを送つて來た。もし同氏が本草書や方言に頼らずに牧野氏の如き専門學者に送つて検定を乞われていたならば *Eleaegnus Ogamii* ともなつていたことゝ同氏のために惜むものである。

又同氏から送られた標本のなかで花実共に無いものであるが、マンリヨウの一種があり、当時から正名不詳であつたが、オホバマンリヨウというものかと考え、その標品は私が勤めていた大阪市東淀川區十三西之町武田薬工株式会社附設研究所標本室に収めておいたから今尙残つて居らう。 (Sept. 16. 1949 備中高梁町 吉野善介)